

おばあさんと黒ねこ

小川未明

青空文庫

いまでは、いい薬くすりがたくさんにありますけれど、まだ世間せけんが開けひらなかった、昔むかしは、家かてん伝薬ぐすりなどを用もちいて病びよう気きをなおしたものであります。

この話はなしも、その時じぶん分のことで、雪ゆきの降ふる北きたの国くににあつたことでした。

おじいさんは、働はたらいて、たくさんのお金かねをおばあさんに残のこして、先さきへこの世よの中なかから去さつてしまった。後あとに残のこされたおばあさんは、独ひとりさびしく暮くらしてゆかなければなりませんでした。

おじいさんとおばあさんの間あいだには、ただ一人ひとりの子供こどももなかったのです。おばあさんは、おじいさんの残のこしていつてくれた、たくさんのお金かねがありましたから、なに不自由ふじゆうなく暮くらしていくことができました。

しかし、おばあさんもまたしあわせな人ひとではありませんでした。ふと目めを患わずらつて、それがだんだん悪わるくなつて、ついに両りようほう方かたの目めとも見えなくなつてしまつたのです。

おばあさんの家うちに、一匹びきの黒ねくろこが飼かわれていました。このねこは、おばあさんが病びよう気きにならない時じぶん分に、ある日ひのこと、犬いぬに追おわれて裏うらの高たかいすぎの木きに逃にげてきて上あがつたのでした。

「あのねこを殺してしまえ。」と、村の子供たちは、犬にけしを掛けて木の下にやってきました。そしてねこを目がけて石を投げつけたり、棒を持ってきて突き落とそうとしたのでありました。

黒ねこは、いっしょうけんめいに、すぎの木の枝にしがみついています。小石は、四方から飛んできて、体のまわりをうなつて飛んでゆきました。それが一つ当たろうものなら、いくらねこは、しつかりしがみついても、目がくらんで落ちずにいられませんでした。ねこはそれを思うと、ぶるぶる震えていたのです。

「もつと長いさおを持つてこいやい。」と、子供たちは叫んでいました。

このとき、おばあさんは、家の内で仕事をしていましたが、あまり犬が吠えますので、何事が起こったのであろうと裏へ出てみました。

すると村の子供らがおおぜい寄り集まってきて、すぎの木に逃げて上がった、ねこを突き落とすとして、犬に殺させようとしていたのであります。おばあさんは、悪いことをする子供らだと思いました。

「ああ、みんないい子だから、そんなことをするものでない。」と、おばあさんはいいました。

子供らは、おばあさんのいうことなどを耳にいれません。

「あのねこは、鶏のひなを取った悪いねこだもの、殺したってかまいはしない。」

「あのねこは、宿なしなんだから、だれもしかりやしないんだ。」

子供たちは、かつてな理屈をつけて、さおにさおを継ぎ足して、どうかして高い木の枝までとどくようにしたいと苦心していました。

犬は、上を仰いで、おおぜいの子供たちの加勢があるので、ますます猛り吠えていたのです。

おばあさんはこの有り様を見ると、木の上にしがみついているねこがかわいそうでなりませんでした。

「そのねこは、家がないなら私におくれ、飼ってやりましょう。そのかわり、そこにいるみんなにお金をあげるから……。」と、おばあさんはいいました。

子供たちは、お金をくれるといわれたので、たちまちおとなしくなっていました。

おばあさんはみんなにお金を分けてやりました。子供たちは、犬をつれてどこへとなく去ってしまったのです。ねこは、ようやくにして危うい命をおばあさんに助けられました。

おばあさんは、ねこの好きそうな魚をさらにいれて裏口に置いてやりました。日暮れ方

になると、ねこは、まったくだれもあたりにいないのを見すまして木から降りてきました。こうして、この黒ねこは、その日からおばあさんの家に養われたのでした。

ある日、おばあさんは、ねこに向かつて、

「私は、このように目が見えなくなってしまった。おまえは、これから、私の力になつてくれなければいけぬ。」といわれました。

この村の人たちは、おばあさんが金持ちだということを知っていました。そこで、村は小さくて、いたつて戸数は少なかったけれど、おばあさんの家を除いては、いずれも貧乏でありました。

中には、困ると、おばあさんのところへお金を借りにやってきました。おばあさんは、いい人でありましたから、いやだとはいえませんでした。それに、自分は一人であるし、また村の人たちの世話にならないともかぎらないからと思つて、お金を貸してやりました。「おばあさんから借りたのだから、早く持つていつて返さなければならぬ。」といつて、正直な人は、金ができると返しにゆきました。しかし、よくない人間もあつて、「どうせおばあさんは盲人だ。それに金を持っているのだから、すぐに返すことはない。」といつて、約束の日がきても返さないものもありました。

黒いねこは、よく人間を見分けたのでした。

「おばあさん、困っていますから、お金を貸してください。」と、村の人がいつてきても、ほんとうに困っていて、また約束を違えずに返す人なら、ねこは、おばあさんのひぎの上に乗って、のどをゴロゴロ鳴らしていましたけれど、きた人がおばあさんをだまして、金を取る考えであると、ねこは、その人の腹の中を見破りました。

「おばあさん、この人に、金を貸してやるのは、およしなさい。」といわぬばかりにみえました。

おばあさんは、ねこがそういつて鳴いたときは、金を貸してやるのを見合わせました。いつしかおばあさんの家の黒ねこは、人間よりこうだという評判がたちました。なかにも正直者の人々は、黒ねこをほめましたけれど、腹のよくない、おばあさんをだまそうと思っているようなものは、黒ねこを悪くいつて、あんなのを生かしておいては、末になつて、怖ろしいなどといふらしたのであります。

また、あるときは、黒ねこのことを、

「あのねこは化けますよ。ひとりで障子を開けたり、閉めたりします。また、おばあさんが、目が見えないと思つて、手ぬぐいをかぶつて、踊つたりするのです。」といつて、

どうかして、黒ねこを退治してしまおうとしました。しかし、なかには、黒ねこをかばうものもあり、また黒ねこがりこうで、容易に、その人たちの手にかからなかったのです。おばあさんには、べつに身内のもものというほどのものもなかった。病気になるまで、病気に罹ると村の人たちが、しんせつに世話をしてやりました。おばあさんはいい年でもありましたから、病気に罹るとほどなくこの世から去ってしまいました。

村の人たちは、おばあさんに世話になったものが多かったから、その人たちの手で葬式はすまされたのです。

「さあ、葬式もすんだが、おばあさんは、お金をどうしたろう？」と、いったものがありませんでした。

「なるほど、おばあさんは金持ちだった。きつとどこかへ隠してあるに違いない。」と、あるものはいりました。

集まった人たちは、家の内をくまなく探しはじめたのです。けれど、ほんのわずかばかりの金が財布の中にあつたほかには、まとまった金というものが見当たらなかった。

「お金のないはずがない。きつと天井張りの上だろう……。それでなければ、畳の下にちがいない。」と、あるものはいりました。

天井張りの上も、畳の下も探しましたけれど、やはり金は見いだされなかったのでした。

「おばあさんは、もう金をもっていなかったのじやないか。そして金がなくなると、ちようど自分の命もなくなつてしまつたのだらう……。」と、いったものもありました。

みんなが、こうして大騒ぎをしているのを、黒ねこはあさましそうに黙つて見ていました。

「おお、この黒ねこが知つているはずだ。さあ、どこにお金がしまつてあるか、いえ！ いわなけりや、だれも、飯をやらないぜ。」と、人々は、黒ねこに向かつていいました。黒ねこは、とうとうその日から、主人を失いました。そして、ひとりさびしい暗い空き家にすんでいましたが、だれも、飯をくれるものもなかったから、夜になると外へ出て、あたりのごみためをあさつていたのです。

そのうちに、寒い、怖ろしい冬がやってきました。ごみための上まで雪が深く積もつてしまいました。哀れな黒ねこは、ひもじい腹を満たすことができないので、悲しい、うらめしい声をあげて深夜に雪の上をうろついたのでした。

家の中では、人々が目をさまして、悲しそうに鳴くねこの声に耳を傾けていました。

「かわいそうに、おばあさんがなくなられてから、だれも、食べ物たものをやるものがないから、ああして鳴きなながら、探さがして歩いてあるいるのだ……。」と、いつていました。

それは、吹雪ふぶきのした、寒さむい、寒さむい晩ばんのことでした。黒ねこは圃はたけなかの中で凍こごえて死しんでいました。村むらの人は、それを見みつけたけれど、気味悪きみわるがって、その死骸しがいに手てをつけるものはなかつたのです。

「もう一度、はげしい吹雪ふぶきがすれば、黒ねこは隠かくれてしまいうだろう……。」

そう思おもって、人々ひとびとは、雪ゆきの上うえにある黒ねこの屍しかばねを見みていました。しかし、一度、その黒い動物くろ どうぶつの体からだは、吹雪ふぶきのために隠かくれたけれど、天気てんきになると、また黒くろく、雪ゆきの上うえに現あらわれたのでした。

そのとき、どこからか、たくさんの中からすが集あつまってきて、圃はたけなかの中なかにおり、黒ねこの死骸しがいをつつきました。村むらの人々ひとびとは、雪ゆき球たまを投なげたりしてからすを逐おつたけれど、二、三日いちにちは、そのあたりを、ガアガアと鳴ないて去さりませんでした。雪ゆきが積つもって、山やまにも、里さとにも、食たべ物ものがなくなつたからであります。彼かれらは、黒ねこの屍しかばねを食くいつくすとまた、どこへともなく、飛とんでいつてしまいました。

村人むらびとがそのことを忘わすれてしまった、雪ゆきの消きえたころです。ふたたびどこからともなく

からすが集まってきて、おばあさんの家の裏手の、いつか黒ねこが犬に追われて、逃げてきて上がった、高いすぎの木の枝に巣を造りはじめたのでした。

山の方から、また丘を越えて、海の方から枯れ枝や、海草や、毛のようなものをくわえてきて、からすは巣を造りました。

「おばあさんの家の裏へ、からすが巣を造りましたね。」

「あの家は、黒ねことか、からすとか、いろいろなものがくる、みような家ですこと。」
村の人たちは、こんな話もしたのです。

ある日のこと、みんなが、わいわいいつて空をながめていました。

晩方の空にからすがてんでに、ぴかぴか光るものをくわえて、すぎの木の頂を飛びまわっていたのであります。

「あれは、なんででしょうか？」

村の人たちは、木の下にやってきました。そして、中には、わざわざ木の上へ登ってゆくものもありました。からすは、巣の中へ、光るものをくわえてはいるのもあれば、また、これをくわえて山の方へ、丘を越して海の方へ、思い思いに飛び去ってしまふものもありました。

木の上へ登つていったものは、ようやくのことで、からすに頭をつつかれたり、目をねらわれたりするのを防いで、巢の中から光るものを一枚取り出してみたのでした。

「金の小判だ！」と、木の上から叫びました。

木の下に立っている人たちは、まさか金の小判をからすがくわえてくるはずがないといつて信じませんでした。そのうちに、木から降りてきたものが、それをみんなに見せると、ほんとうに、金の小判でありました。

村の人たちは、大急ぎをして、からすの持つている金の小判を奪おうとしました。しかし、からすは、それをくわえて、いずこへとなく、みんな散つてしまつて、村人の手にはいった小判は、やつと二枚しかありませんでした。

「おばあさんは、金を持つていなされたはずだが、なくなられても金がどこにも見つからなかつたのはおかしいと思つていた。からすが、どこから見つけ出して、くわえていったのだろうか……。」

「まだ、どこかに、隠してあるかもしれない。」

彼らは、宝探しでもするように、おばあさんの家の周囲を掘りはじめたのです。けれど、なにも見いだすことができなかった。

この話が、まったく、不思議な話として伝わりました。その翌年のこと、村に悪い病気が流行しました。ちようど、そのとき、旅の薬売りが村へはいつてきたので、村の人は、その薬売りに薬を買いました。

その薬は、たいへんに病気によくきいたのであります。薬売りは、あちらへ呼ばれ、こちらへ呼ばれました。

「なにか、この村にたたつていてのではありませんか？」と、薬売りはいった。村の人は、べつに、たたるものもないが、おばあさんが死んだけれど、だれも、墓を建ててやるものがないということを告げました。

薬売りは、頭を振りながら、
「それは、よくありません。村の人のお世話になった、おばあさんの墓を建ててあげないという法はありません。」といいました。

「薬屋さん、あなたのいわれるのは、もつともなことです。けれど、この村は、いつだつて貧乏です。そんなにお金がないのです。」と、村の人は答えました。

薬屋は、考えていましたが、

「私の持っている薬は、どれも家伝の名薬です。この薬の造り方を、この村の人たちに

教えてあげましょう。そのかわりに、からすのくわえていたという二枚の金の小判を私にください。私はそれを土産にして故郷へ帰り、この不思議な話をいたします……。」といいました。

村の人たちは、集まって相談をしました。そして、二枚の小判を薬売りにやりました。薬売りは疫病にきく薬の製造法と、下熱剤の造り方を村の人に伝授しました。

この旅人は、小判を携えて、いずこへか去ってしまいました。その後で村の人は、薬売りから教えられた薬を製造しました。この薬もたいへんによく病気にきいたのであります。

「こうなつたのも、おばあさんのしてくだされたことだ。」と、村の人はおばあさんに感謝しました。そして、黒ねことからすの絵を薬の袋に描くことにしました。

疫病にきく、毒下しの薬袋には黒ねこの絵を描き、下熱剤の薬袋にはからすの絵を描きました。村の人は、造つた薬をおぶつて、それから、山を越えて他国へ売りに出てゆきました。国々を春、夏、秋、冬と巡つて、薬が尽きると、また自分の村へ帰つてきたのです。

た。
北^{ほく}国^{こく}のさびしい村^{むら}は、こうしていつしか名^な高^{たか}い薬^{くすり}の産^{さん}地^ちと知^しれ、富^とんだ町^{まち}となりまし

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

※表題は底本では、「おばあさんと黒《くろ》ねこ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

おばあさんと黒ねこ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>